

## 彼岸

春の彼岸に秋の彼岸。ともに中日は祝日になっており、仏教思想はともかく、彼岸という言葉は子供の頃よりなじみの深い言葉である。彼岸と言えば、一般的にはお墓掃除やお寺参りなどがすぐ思い浮かぶのだろうが、私の場合、彼岸というところを二つのことを連想してしまう。

ひとつは、「ぼた餅」だ。「おはぎ」とも言っていた。小さい頃よりお彼岸には、これが付きものだったからである。ぼた餅とおはぎ。どっちがただしいのかは分からないが、ぼた餅は牡丹餅、おはぎはお萩と区別があるらしい。だから春の彼岸では、「ぼた（ん）餅」、秋の彼岸では、「おはぎ」と呼ぶのだと言う人もいる。私は、両方適当に使っていた。ぼた餅は豚餅に聞こえ、おはぎの方が品よく聞こえるので、人前では「おはぎ」と言う方が多かったかも知れない。いずれにしても、腹に入るぶんにはどちらもかわりはないので悩む必要はないのだが。

もうひとつ、彼岸から連想することがある。こちらの方は私には深刻なのである。

彼岸の中日、二十日に一歳五ヶ月になる孫を連れて、新津にある県立植物園に出かけた。午後、陽の高い時間帯二時間を園で過ごした。三月にしては気温も高く暖かいとい

うより暑いと表現したくなるほどだった。暑さ寒さも彼岸まで、と古くから言われているが、私にとって彼岸は全く意味の異なる分岐点となる。

前置きが長くなったが、連想する深刻なこととは、花粉症のことである。

それは、私にとって春と秋の彼岸が花粉症発症の時期にあたるからだ。春の彼岸頃より杉花粉症の症状が出て、花見時の楽しい時期にピークを迎える。そして五月のゴールデンウィークは悲惨な状態のまま過ぎ、六月の梅雨時ようやく症状は沈静化する。昔はこれで終わりだった。ところが、数年前から九月の稲刈りシーズンにまた症状がぶり返し、秋の彼岸時期より本格化するようになった。散歩道に咲くブタクサ、ヨモギなどキク科の風媒花が起因となって、稲刈りが完了した後の、脱穀したモミガラを野焼きする煙なども症状を継続させる原因になっているようだ。こうして、紅葉シーズンまでに治まるかどうか、私が秋の楽しさを満喫できるか否かにかかっている。

そもそも、私と花粉症の付き合いは長い。

昭和五十年代前半、当時は東京に勤務していた。春先、季節の変わり目に風邪を引いた。

三寒四温と呼ばれるこの時期、暖かいと感じて薄着になることで風邪を引きやすいのだ、と勝手に解釈していた。

私にとっての「彼岸」は「悲願」でもある。

それで年度末で多忙の三月、鼻をグシグシ、咳やくしゃみなどの症状に、一所懸命市販の風邪薬を飲んでいた。それが四月五月になっても直らないのである。風邪をこじらせてしまったかとさらに薬を連用していた。当時はまだ花粉症の言葉を私は知らなかった。だが今にして思えば、これが花粉症との出会いだったのだ。

以来、三十年間、花粉症に悩まされ続けている。一番困るのは、お客様との応対である。電話で話そうとすると咳が出たり、来客の際に鼻水を拭きふき面談したり之苦労談に事欠かない。あるときは来客と面談中、お互いにハンカチを鼻に当てて面談したこともあった。ビジネスの話題にはいる前に、花粉症の話で盛り上がってしまった。

数年前、高齢者に花粉症の人が少ないという話を聞いた。花粉症は、ある種の外敵に対して抵抗する結果である。ところが高齢者は抵抗力が弱くなっているから症状が現れないのだそうだ。ならば、私の場合まだ抵抗するだけの力が備わっているということになる。こう考えてみると花粉症は体力の判断材料になり、あながち、悪いことだけではなさそうだ。とはいっても、早く花粉症から卒業したいと切に願っている。何の憂いもなく、ボタ餅、おはぎを食べながら「花粉症 涙もクシヤミも 彼岸から」を払拭したい。